

厚木市史たより 第11号

平成26年10月1日

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。



図1 歌川国経画 清水寺観音堂奉納絵馬「太閤□□□□図」享和3年(1803)3月 縦89.3cm 横137.2cm
盗賊石川五右衛門が真柴久吉(秀吉)の寝所を襲う「桃山御殿の場」(『楼門五三桐』五幕)(海老名市国分北 龍峰寺蔵)

郷土の絵師歌川国経

厚木市史編集委員会委員 平本元一

1 はじめに

アミューあつぎ開館(平成二十六年四月)に伴い、厚木市が所蔵する江戸時代から明治時代の浮世絵名品展示会が開催されました。この展示において、市内上荻野出身の絵師歌川国経が描いたとされる美人図(写真パネル)の前で多くの方が足を止め、熱心に見入っていました。国経は江戸の浮世絵界の巨人歌川豊国（註）の門人であったことから注目されることとなりました。そこで、今号では国経についての現在までの研究をまとめ、改めてその作品について考えてみたいと思います。

2 研究史

これまでに確認されている研究等は次のとおりです。昭和三十年代の調査研究を経て、その後の市史編さん等において作品が紹介されてきました。

- 昭和三十五年 吉沢 忠「国華」822号「歌川国経の絵馬」
- 昭和三十五年 伊勢原市上粕屋比多神社
- 歌川国経筆美人図絵馬 神奈川県重要文化財指定
- 昭和三十六年 「県史史談」創刊号(歌川国経特集号)
- ・ 洪江二郎「国経画の絵馬とその修復について」
- ・ 小沢 幹「国経の生家と墓石をめぐる」
- ・ 児島李雨「清水寺の絵馬」
- ・ 渡辺 勲「国経の生家とその画遊女図について」
- 昭和三十七年 吉沢 忠「神奈川県文化財調査報告」第27集「歌川国経の二つの絵馬」
- 昭和三十八年 「県史史談」第二号
- ・ 洪江二郎「歌川国経画美人図絵馬の修理について(二)」
- ・ 小沢 幹「歌川国経の生家と墓石をめぐる(二)」
- 昭和五十六年「神奈川県文化財図鑑」絵画編「歌川国経筆美人図絵馬」
- 昭和六十三年 澁谷家の大黒天図発見
- 平成十二年 飯田 孝「相模人国記」「歌川国経」
- 平成十三年 飯田 孝「海老名市史」7 通史編近世「国分清水寺に奉納された歌川国経の絵馬」

○平成十五年 飯田 孝『厚木市史』近世資料編(3)
文化文芸 「絵画・墨跡Ⅲ 歌川国経」

○平成二十二年 飯田 孝『伊勢原市史』通史編近世
「歌川国経の絵馬」

○平成二十六年 平本元一『浮世絵名品展』図録
「歌川国経」

3 二つの墓石

国経は市内上荻野田尻の斎藤家に生まれました。菩提寺は曹洞宗華厳山松石寺です。生家近くの墓地に墓石がありますが、伊勢原市日向の浄発願寺にも形状がよく似たものが所在します。さて、生家の墓地の墓石は、図2のとおりです。塔身及び台石がともに正六角柱という形態は、市内寺院の墓石調査結果をみてもこうした例はなく、非常に珍しいものです。

六角形とした意図は不明ですが、仏教では衆生が善悪の業によっておもむき住む六つの迷界(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天)を六道といい、この間で生まれ変わり、死にかわるといふ考えがあります。石質は凝灰岩(七沢石)のため、風化、剥落がみられます。

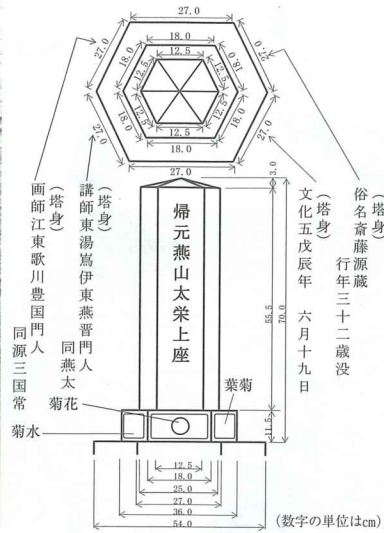


図2 斎藤家墓地の国経墓石



図3は浄発願寺のもので、浄発願寺は無常山一澤院といふ天台宗寺院です。慶長十三年(一六〇八)に木食弾誓上人により創建され、元禄年間(一六八八〜一七〇三)に堂宇が整備されたといえます。特に、尾張徳川家からは篤く信仰されました。元の堂宇は日向川の上流にありましたが、昭和十三年の台風被害により流失し、現在の地に移転しました。

国経の墓石も旧地にあり土砂に埋められましたが、偶然に発見され現在地に移転されました。形態は生家の墓石と同様に正六角柱ですが、旧地では見られた同形の台石は見当たらず塔身のみです。浄発願寺に造塔された経緯は不明ですが、美人図絵馬が奉納された比多神社(子易明神社)とは直線距離で二・四kmほどの比較的近い距離にあります。

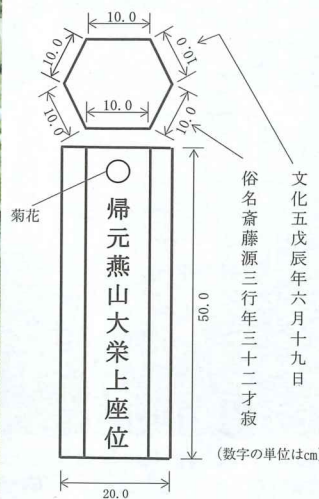


図3 浄発願寺の国経墓石



4 絵師と講釈師

右の両墓石の刻銘等から、国経は本名斎藤源藏(又は源三)といひ、

- ・文化五年(一八〇八)六月十九日に三十二歳で亡くなった。
- ・講釈師(講談師)伊東燕晋の門人で、燕太と名乗った。
- ・歌川豊国(初代)の門人で絵師として国経(国常)と名乗った。

ことが分かります。没年から逆算すると生年は、安永六年(一七七七)、絵師と講釈師の二つの顔をもっていたこととなります。講釈師伊東燕晋(宝暦十一年(一七六一)〜天保十一年(一八四〇))は、伊東派の祖で湯島天神(東京都文京区)境内の自宅において『曾我物語』などの軍談を講釈し、文化三年(一八〇六)、將軍徳川家斉に『川中島軍記』を講じたといえます(『国書人名辞典』)。絵師歌川豊国(明和六年(一七六九)〜文政八年(一八二五))は、歌川派の開祖豊春(豊春)入門し、美人画、役者絵など広い分野に筆をとり、国貞、国芳など多数の門弟を育て、浮世絵界の最大派閥を形成しました。主な活動期は天明期(一七八一〜一七八八)から文政期(一八一八〜一八二九)で、寛政期(一七八九〜一八〇〇)の美人画は特に品格のあるものとされています(図5)。また、役者似顔絵は豊国の代名詞となるもので、数多くの浮世絵が版行されています。

5 作品

次に国経の作品についてみてみます。

○伊勢原市上粕屋比比多神社奉納美人図絵馬



図4 伊勢原市上粕屋比比多神社奉納美人図絵馬

画題…(美人図)

落款…東都一陽斎歌川豊国門人 国経画(印)

法量…縦一・七・五cm 横八三・〇cm

願主等…上荻野願主 神崎半兵衛 網寫佐七 神崎長

左衛門 斎藤伝右衛門

年紀…享和二歳十二月吉日

遊女を描いた図で、顔はやや細面で、身長は七頭身又は八頭身に近く、高くすらりとしてバランスがよく、姿勢もしつかりとしています。寛政・享和期(一八〇一、一八〇三)の豊国は渋味の黒と紫を好んで用いているといわれますが、この国経の図にもそうした師の影響がみられるようです。



図5 豊国「山屋仮宅之図」大判3枚続(部分)
寛政六年(一七九四)(原色浮世絵大百科事典第8巻から転載)

○海老名市国分北清水寺観音堂奉納絵馬(図1)

画題…太閤□□□□図
落款…歌川国経(花押)

法量…縦八九・三cm 横一三七・二cm

願主等…同国 熊坂村 梅沢市良兵衛

年紀…享和三歳三月日

その他…(裏面墨書) 享和三歳三月吉日

画工 歌川国経 願主 熊坂邑 梅沢市郎兵衛

『楼門五三桐』(寛政十二年(一八〇〇)に『金門五三桐』を改題)。盗賊石川五右衛門を脚色した歌舞伎演目で、全体五幕のうち三幕目の南禅寺山門での真柴久吉との出会いが有名です。この図は、五幕目の桃山御殿の場で、五右衛門が真柴家の重宝・千鳥の香炉を盗み出し、さらに久吉の寝所に入り込み、鉄砲で撃ち殺そうとしますが、千鳥の香炉が鳴き声をあげたため、久吉に気付かれて捕えられるというものです。中央の黒頭巾の人物

が五右衛門、右上奥御簾内の烏帽子姿の人物が真柴久吉です。武者絵のジャンルですが、全体のバランスや個々の人物描写など図4の美人図に比して劣る印象があり、国経はあまり得意ではなかったかもしれません。奉納の経緯は不明ですが、熊坂村(現愛川町中津)願主梅沢市良兵衛は、酒屋、醸造業といわれることから(吉沢忠「歌川国経の二つの絵馬」)、醸造に必要な清水と寺名の清水寺とは偶然でしょうか。また、桃山御殿は伏見城の別称であることから、酒造業を連想させます。講釈師伊東燕太(国経)は石川五右衛門も語っていたかも知れません。

○大黒天図



図6 大黒天図(上依知 澁谷宗康氏蔵)

画題…(大黒天図)

落款…歌川国経画圖

法量…縦一二六・〇cm 横五四・〇cm

願主等…賛は上荻野村松石寺二十九世大滝亮山

年紀…享和四年甲子正月元旦書始

大黒天はもともとインドの神で、江戸時代には大國主命と習合して七福神の一柱となりました。また、農神、福神として、大黒天が十二支の子の方角(北)の神となることから、十干の最初の甲と合わせて甲子の日を祭日として、この日に甲子講、大黒講を催し、寝ずに雑談して過ごすことが行われました。

甲子講は、『厚木の民俗』3講では金田、下古沢、飯山、下津古久での四例が確認されています。正月元旦に因む七福神とともに享和四年(一八〇四)が甲子であることから、甲子講にも係るものではないかと考えられます。

○美人図 文を読む女



図7 美人図(文を読む女)

この美人図は縦一二九・〇cm、横五六・五cm、紙本着色肉筆画で、国経の生家である斎藤家に伝来するものです。画題、落款、印章等が全くありません。文政十一年(一八二八)九月の年紀のある箱に納められています。本図について渡辺氏は「恰も生ける美人を眼前に見る如き名筆で(中略)、構図筆法、彩色又斎藤家の由来等よりして、国経自筆に相違あるまい。」(『県史談』創刊号)とし、吉沢氏は国経が描いたという仮定の下で、『豊国浮世絵集』(藤懸静也)を引用し「師である豊国の美人画の画風を近くで忠実に学んでいるという。すなわち、豊国美人画は文化二年(一八〇五)を境として、それまでの丈高くすらりとした容姿から、眼が大きく吊りあがったようになり、丈は低く、猫背のようになつて、芸術的価値をいたく減ずるようになったという」(吉沢 忠「歌川国経の二つの絵馬」と述べています。確かに吉沢氏の指摘のとおり、本図は比多神社美人図絵馬と比較するとその変化がはつきりとしています。目じりが上り、猫背となり全体的にあまりバランスの良くない六頭身くらいの姿となっています。

なお、この箱には他に豊国筆の宝珠図(寛政十二年(一八〇〇)、井上五川筆の「七十五歳偶言五川印」の落款を有する馬頭観音図、「八十才偶言五川印」の落款の孔子像図の二幅が同梱されています。馬頭観音像の裏面には世話人十五人の名が記されており、また日輪、月輪が描かれているところから日待、月待の講にかざられたものでしょうか。

6 荻野村出身の絵師

江戸時代の厚木市域では多くの俳人や狂歌師、挿花師、書家等が活躍していましたが、荻野村では国経以外にも次の絵師が知られています。

○島崎且良 明和三年(一七六六)～文政元年(一八一八)。中荻野村柳田庄兵衛家に生れ、名は源内。雅号は田美濟、且良、金谷莊子源。天明五年(一七八五)、武蔵国多摩郡小山村玉利屋(醸造業)島崎家養子。養徳寺の「釋迦文殊普賢十八羅漢図」(天明七年(一七八七)筆。師は駿河台狩野家第四代当主法眼洞春美信及び洞雪美明。表具師は江戸麹町貝坂の荻野新八郎。

○難波洞雪 生没年不詳。下荻野村新宿(新し)生れ。名は難波兵吉。洞春美信門人。雅号は洞雪美明。戒善寺涅槃図(安永二年(一七七三)・本照寺涅槃図(年月不詳。安永頃か)筆。三田八幡神社彩色(安永四年(一七七五))。○井上五川 上荻野村打越出身。名は井上定八。寛政四年(一七九二)～明治八年(一八七五)。市内及び近隣神社等に作品多数所在。

以上の絵師が残した作品の年代(丸印、白丸は推定)、生没年又は活動期を表にしたのが図8ですが(洞雪は不詳)、それぞれが同時代に活躍していた様子がわかります。

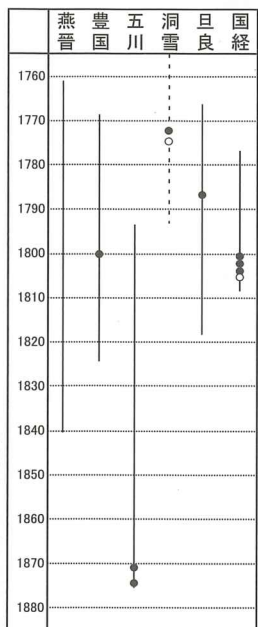


図8 荻野村出身絵師の関係

7 おわりに

歌川国経についてのこれまでの研究成果や墓石、作品等は以上のとおりですが、まず、生家である斎藤家に伝来する美人図について考えてみます。絵は紙本著色の無落款の肉筆浮世絵です。顔がややふっくらとし、

首も太めで短い猪首で、猫背の姿となっています。着物の裾から覗く白い足や文を読む手は細く、顔や全身とのバランスがやや統一を欠く印象があります。国経の師である豊国は、寛政期に芸術的に最高潮に達し、寛政末から享和期には諸先輩の影響を脱し、文化文政期(一八〇四～一八二九)には俗化し、やさしさがなくなり、はりのこもった仇な女の姿という歌川派の型を作り上げたといえます。特に、文政年間には五代瀬川菊之丞似の美人画風を作り上げ、役者絵では短軀で猫背・猪首の独特の姿態表現を行ったといえます(吉田暎二『浮世絵事典』)。また、武者絵についても寛政九年(一七九七)

～享和二年(一八〇二)に『絵本太閤記』を出版し人気を得たといえます(『浮世絵大事典』国際浮世絵学会編)。太閤記は光秀(武智光秀)の反逆を中心に秀吉(真柴久吉)との関係を描いたもので、講釈話としても人気を得ていたといえます。豊国の画風の変遷は以上のおりですが、門人である国経が当然その影響を受けていることが考えられます。国経作品にはそうした豊国の画風の変遷がよく映しこまれているように見えます。すなわち、享和二年の比比多神社奉納美人図絵馬は、顔が細面ですらりと背の高い姿で描かれ、豊国が芸術的価値の高い美人図を描いていた時期に当たります。翌年の享和三年に『楼門五三桐』を題材とした清水寺観音堂の絵馬は、豊国が武者絵を描いた『絵本太閤記』成立の翌年になります。そして無落款の美人図「文を読む女」の特徴は文政期の画風と符合するところであり、国経筆の画とみられています。絵師にとって最も大事な落款や本人である証明の印章がないこと、享和期の比比多神社美人図絵馬との大きな落差及び豊国画風変化の画期とされる文政期が、国経没年の文化五年から十年後の年代であることなどから、国経筆は極めて慎重に行われるべきではないでしょうか。

さて、本図の国経作如何はさておき、同時期に国経のほかに荻野村出身の絵師、島崎且良、難波洞雪が江戸で活躍し、表具師も江戸で営業を行っていたといえます(島崎秀雄『泉史談』44号「養徳寺所蔵の釋迦

文殊普賢十八羅漢図について)。国経も恐らくこうした人たちと何らかの関係をj得て、江戸へ出て絵師の道を志したのではないのでしょうか。当時、中荻野村山中には山中陣屋が置かれ、江戸との往来により様々な情報もたらされたと考えられます。絵師という一種のインテリ層を中心に形作られた豊かな文化の流れは、明治以降も伝えられています。松石寺二十九世亮山が授けたであろう国経の戒名には、絵師国経ではなく講釈師「燕太」の二字が用いられています。これは絵師と講釈師という二つの顔を持った斎藤源藏の、絡み合った二つの道を解きほぐす鍵になるのかも知れません。本稿の執筆に当たり、龍峰寺、斎藤祥治氏、浄発願寺、上粕屋比比多神社の皆様御協力と御指導を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

発刊のお知らせ

『厚木市史』民俗編(1)生活記録集

▼平成26年3月発刊

▼A5版 八一五頁

▼有償販売価格 五一一〇円

厚木市役所一階市政情報コーナー、厚木市郷土資料館で販売中です。

厚木市史たより 第11号

平成26年10月1日発行

編集 厚木市教育委員会文化財保護課

発行 厚木市

住所 神奈川県厚木市中町三二一七

電話 〇四六―二三五―二〇六〇

FAX 〇四六―二三三―〇〇八六

『厚木市史たより』は厚木市ホームページにも掲載しております。